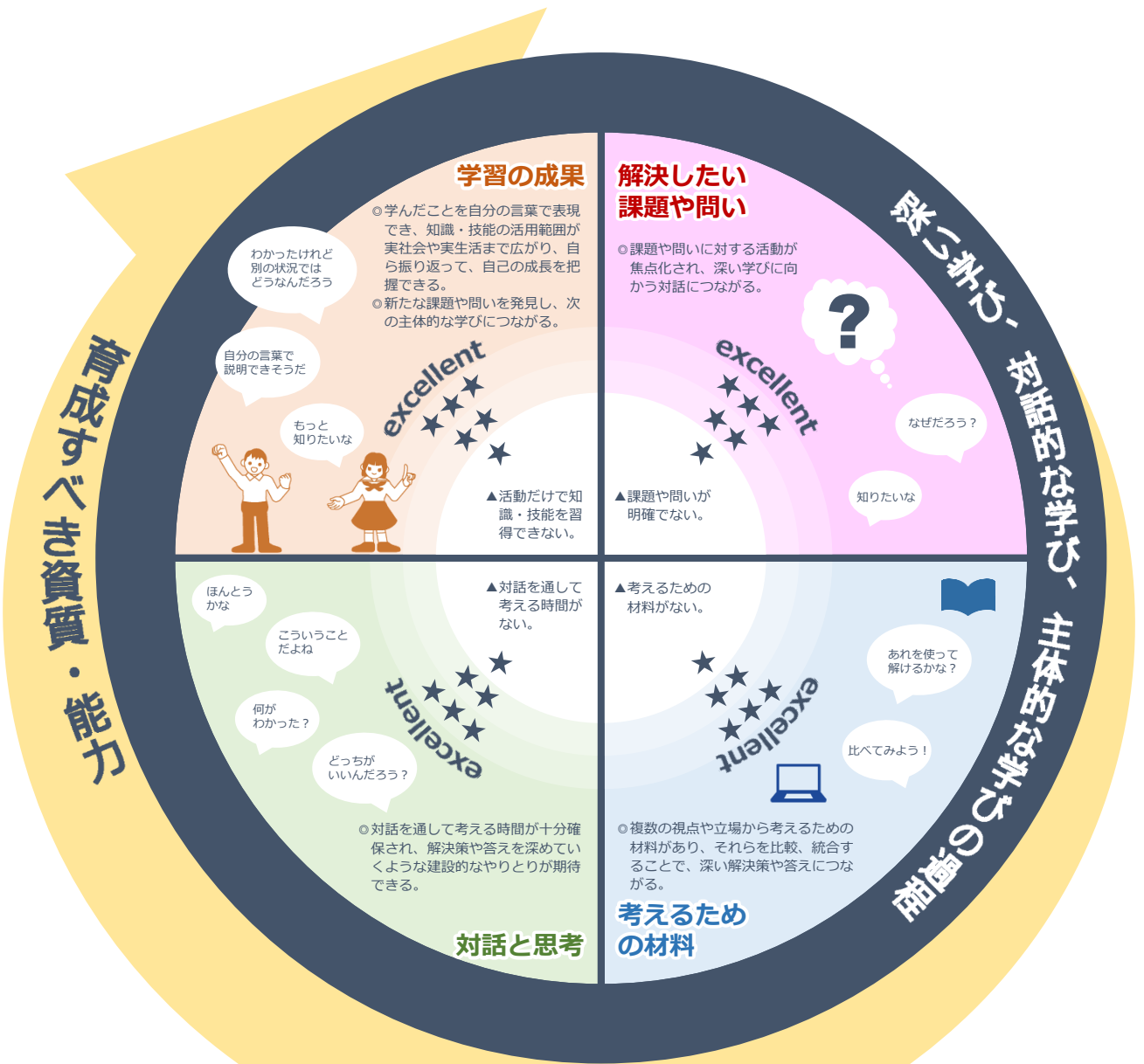


アクティブ・ラーニング

課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び

＜小学校、中学校、高等学校、特別支援学校共通版＞

新しい時代を切り拓く資質・能力を引き出し、高める



子供たちが「どのように学ぶか」に焦点を当て、

- 解決したい課題や問い
 - 考えるための材料
 - 対話と思考
 - 学習の成果
- を意識して授業を設計しましょう！

上の図は、「アクティブ・ラーニング」の視点による授業改善を図式化したものです。図の中の子供たちのつぶやきは、学びの過程で湧き上がってくる手応え（学びの実感）を表現しています。子供たち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質・能力を確実に育成していくためには、深い学び、対話的な学び、主体的な学びの過程を実現することが必要です。それらの学びの過程を実現するために、「解決したい課題や問い」、「考えるための材料」、「対話と思考」、「学習の成果」を意識したり、工夫したりしながら、授業設計することを提案します。目指す授業設計はexcellentです。詳細はリーフレットの中をご覧ください。

アクティブ・ラーニングの視点からの授業設計診断

次の表は、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業設計を診断するものです。診断する項目は「解決したい課題や問い」、「考えるための材料」、「対話と思考」、「学習の成果」の4項目です。各項目とも「★」から「excellent」に向かって確認してください。「excellent」に近づくほど、問題発見、協働的問題解決のために必要な「思考力・判断力・表現力等」や、「主体性・多様性・協働性、学びに向かう力、人間性等」の資質・能力を引き出し、高めることにつながります。また、各教科等の「個別の知識や技能」についても、こうした設計による学習の中で活用することにより、既存の知識や技能と関連付けられ体系化されながら、使える知識や技能として深く定着することが期待できます。リーフレットに示す授業例と併せて、授業設計の参考にしてください。

項目	★	★★	★★★	excellent
解決したい課題や問い 	<p>▲課題や問いが明確ではない。</p> <input type="checkbox"/>	<p>△課題や問いはあるが、解決に対話が必要としない。</p> <input type="checkbox"/>	<p>○課題や問いがあり、解決に対話が必要である。</p> <p>△課題や問いに対する活動の幅が広すぎて、活動が焦点化されにくい。</p> <input type="checkbox"/>	<p>◎課題や問いに対する活動が焦点化され、深い学びに向かう対話につながる。</p>  <input type="checkbox"/>
考えるための材料 	<p>▲考えるための材料がない。</p> <p>材料とは、資料、道具、教材など教師が事前に準備しておくもの。</p> <input type="checkbox"/>	<p>△考えるための材料はあるが、課題や問いに対する解決策が明示されてしまっている。</p> <p>△材料や解決策を、事前に教師が説明してしまう。</p> <input type="checkbox"/>	<p>○複数の視点や立場から考えるための材料がある。</p> <p>△限定的な考えに誘導するものである。</p> <input type="checkbox"/>	<p>◎複数の視点や立場から考えるための材料があり、それらと比較、統合することで、深い解決策や答えにつながる。</p>  <input type="checkbox"/>
対話と思考 	<p>▲対話を通して考える時間がない。</p> <p>対話とは、課題や問いに沿って考えが広がったり深まったりする言葉のやりとりのこと。</p> <input type="checkbox"/>	<p>△対話を通して考える時間が確保されているが、各自がまとめた内容を紹介するだけである。</p> <input type="checkbox"/>	<p>○対話を通して考える時間が確保されている。</p> <p>△教師の過度な助言により、対話や思考が抑制されてしまう。</p> <input type="checkbox"/>	<p>◎対話を通して考える時間が十分確保され、解決策や答えを深めていくような建設的なやりとりがなされる。</p>  <input type="checkbox"/>
学習の成果 	<p>▲活動だけで知識・技能を習得できない。</p> <input type="checkbox"/>	<p>△知識・技能の活用範囲が狭い形の習得にとどまっている。</p> <input type="checkbox"/>	<p>○学んだことを自分の言葉で表現でき、知識・技能の活用範囲が広がり、振り返りを通して、自己の成長を把握できる。</p> <p>△課題や問いを解決することで満足し、そこに新たな課題や問いが生まれにくい。</p> <input type="checkbox"/>	<p>◎学んだことを自分の言葉で表現でき、知識・技能の活用範囲が実社会や実生活まで広がり、自ら振り返って、自己の成長を把握できる。</p> <p>◎新たな課題や問いを発見し、次の主体的な学びにつながる。</p>  <input type="checkbox"/>

カリキュラム・マネジメント

学校教育目標を実現するために、教育課程を編成し、それを実施・評価・改善していく営み

＜小学校、中学校、高等学校、特別支援学校共通版＞

教科横断的な視点から教育活動の改善を図る

教育課程編成の手順

- 1 学習指導要領が
目指す資質・能力とは？
各教科の意義とは？
- 2 自校が目指すべき
教育目標や、育成すべき
資質・能力とは？
- 3 教育目標や、育成すべき
資質・能力に基づき、
教育課程をいかに
編成するか？

Plan

アクティブ・ラーニング

学習の成果
解決したい
課題や問い
対話と思考
考えるための
材料

地域・社会・世界

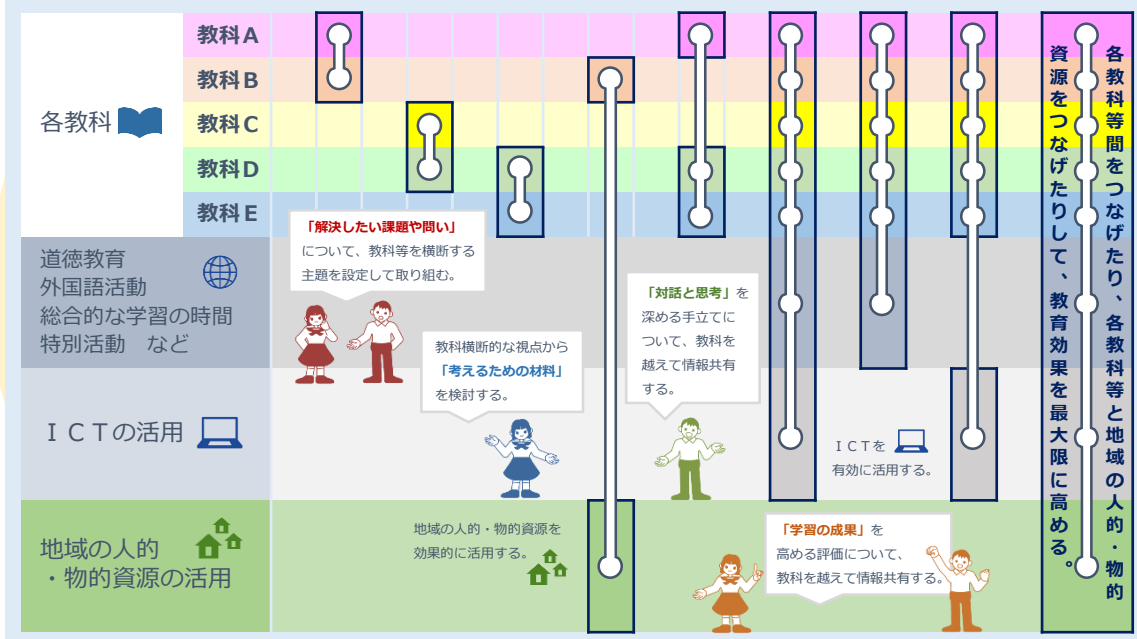
「社会に開かれた教育課程」
を実現する

- 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい社会創りを目指すという理念を、教育課程を介して社会と共有していく。
- 社会や世界に向き合い関わり合っていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化していく。
- 学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させる。

「論点整理」より抜粋

Do

各教科等をつなぐ教育課程の編成と実施例





Action

Check

上の図は、「カリキュラム・マネジメント」のうち、教科横断的な取組を中心に、図式化したものです。「社会に開かれた教育課程」を実現し、子供たち一人一人の資質・能力を確実に育成していくためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが重要です。各学校が子供たちの姿や地域の実情等を踏まえつつ、校長を中心に、教科等や学年を越えて学校全体でPDCAサイクルを確立して教育活動に取り組み、「アクティブ・ラーニング」の質を高めていくことが求められています。詳細はリーフレットの中をご覧ください。

よりよい学級と社会を創る教室文化の診断

各教科等による「アクティブ・ラーニング」の積み重ねにより、子供の資質・能力が育成され、多様な他者と協働して課題を解決していく教室文化（子供たちが学級において共有している行動様式や生活様式）が醸成されているか診断してみましょう。「学級の全員が、互いに互いのことを、よりよい学級や社会を創るための、学びを深める大事な仲間と思うようになっている」は、特に成熟した学級と言えます。子供たちが互いの異なる考えを尊重し、これからのよりよい社会を様々な人々と共に創造できるようにしたいものです。

		いない		いる					
		0	1	2	3				
教室における安心感 	1	間違いを言うてはいけないという雰囲気なくなり、安心して自分の意見を言えるようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	2	自分の意見を相手にわかってもらいたいと思い、発言するようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	3	相手がどんな意見をもっているのかに関心をもち、その意見を聞こうとするようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
よりよい学級を創る学びの態度 	4	資料から情報を単に読み取るだけでなく、それを解釈するようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	5	わからないことをそのままにせず、積極的に質問するようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	6	与えられた課題や問いに答えるだけでなく、新たな課題や問いを発見するようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
	7	学んだことを日常生活や社会と関連付けて生かそうとするようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
学び合い 支え合う仲間	学級の全員が、互いに互いのことを、よりよい学級や社会を創るための、学びを深める大事な仲間と思うようになっている。				<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

■ 研究協力者

静岡大学大学院教育学研究科・同附属学習科学研究教育センター（RECLS）センター長
中央教育審議会教育課程部会ワーキンググループ委員

益川 弘如 先生

このリーフレットには、児童生徒一人ひとりが、自分なりに各教科を好きになり深く学び続けたいような、学習に関する科学的知見が詰め込まれています。是非、各先生の授業づくりや校内研修に活用して下さい。例えば、研修等で学習指導案を作成するときに複数人で授業設計診断を用いてチェックすることで、より深い学び、対話的な学び、主体的な学びを引き出す学習指導案になるでしょう。そのときに、具体的に児童生徒が「どのような対話をしようか」をシミュレーションしてみてください。そして授業終了時に、児童生徒たちがどのような「ことば」で語るだろうかを具体的に検討し、それを評価指標にすることが、指導と評価の一体化につながるでしょう。児童生徒にとって一つの授業は部品であり、各教科や行事を横断的・総合的に学んでいきます。そのような視点から、各教科の内容や学び方が分断されず、一体的に深く学んでゆける環境をいかに構築するかの視点も重要となるでしょう。

国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 総括研究官
中央教育審議会教育課程部会ワーキンググループ委員

白水 始 先生

このたび、静岡県総合教育センターから、このようなリーフレットが刊行されたことを頼もしく思います。中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理（平成27年8月）にも、教員一人一人が学びの質や深まりの視点を押さえ、学習・指導方法について「研究を重ね、ふさわしい方法を選択しながら、工夫して実践できるようにすることが重要」と書かれたように、各現場の創意工夫でより良い解が模索され続けることがこれまで以上に求められています。このリーフレットは、静岡県の先生方の創意工夫を支えられた現時点の一つの解でしょう。だからこそ、今後たくさんの実践が積み重ねられ、先生自身が授業や「子どもはいかに学ぶか」について語り合いながら、お一人おひとりがこのリーフレットを叩き台使って、ご自分なりのリーフレットを創っていく—そんな姿がまさにアクティブ・ラーニングの具現化なのだと思います。さらに、それが教科等を超えて子どもたちの総合的な学習経験のデザインにつながれば、それはまさにカリキュラム・マネジメントだと言えるでしょう。今後の先生方ご自身のアクティブ・ラーニングに期待します。

■ 参考文献等

- 「中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理（平成27年8月）」に加え、次の資料等を参考に作成しています。
- より深く「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」について学びたい方は、これらを参考にしてください。
- ・「21世紀型スキル：学びと評価の新たなカタチ」（三宅なほみ、益川弘如ら・北大路書房・2014年）
- ・「資質・能力（理論編）」（国立教育政策研究所・東洋館出版社・2016年）
- ・「教師の言葉とコミュニケーション」（秋田喜代美ら・教育開発研究所・2010年）

■ 当リーフレットの動画による説明・問い合わせ先

静岡県総合教育センターのホームページ（<http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/>）から動画による説明を視聴することができます。なお、当リーフレットに係る問い合わせは、総務企画課企画班（0537-24-9706）にお願います。